



Fグループ会報

No. 15

フェリス女学院短期大学
音楽科
Fグループ

山田一雄先生、 山岡優子先生を囲んで



去る6月8日、ザ・ホテルココハマに於いて、芸術院賞を受賞されました山田一雄先生、又シュヴァリエ文芸勲章をフランス政府より授与されました山岡優子先生をお招きし、ささやかなお祝いのパーティーが開かれました。数名の卒業生の楽しい思い出話をお聞きしながら80名余りの集まりでしたが、楽しい一時を過ごしました。

芸術院賞受賞をめぐって

— FM音楽手帳より —

去る5月にNHK-FMで山田一雄先生と中野博司先生の対談が放送されました。30分に及ぶお話しは大変興味深いもので、全部御紹介できないのが残念ですが、少しでも先生の音楽に対する情熱を感じていただきたいと思えます。

…… 略 ……

「ともかくね、現在でもそうだけど、戦後なんていうのは、やられていない、開発されるものがまだたくさんあるわけ。それをビックアップしていかないとね。そしてその先端に立たないと、やはりどうにも進んでいかない。まあ指揮者っていうのは、ただ棒を振るだけじゃなくて、その当時の文化をなんらかの形で推進するという役目もあるような気がするんですね」

「やはり、あの当時（昭和25年頃）生で音楽を聞ける、それだけでも喜びでしたし、そしてどんどん新しい、20世紀の音楽が聞こえる、あるいはまたバロックのバッハなんか聞こえてくる、というのがまあともかく若者にとっては楽しい時代でございました。」

「何しろね、聴衆がもう熱狂的だったということは、まあその前の戦争中、飢えていたということもあるし、大震災にね、よく我々人間はね、歴史と文化がなければ現在生きていられない、と言うんだけど、大震災じゃなくて、それが実際、音楽という文化をね、みんな食うものもないのに、こう集まってきてくれたということは、やっぱり、それはうそではないと。やはり文化がPOORになればやっぱりなんかその、平均化して自分の中で消化したいというようなものがやはりあるんだなあって感じましたね、あの熱烈なね……」

「ま、今はね逆という、あまりにも豊かになりすぎちゃって、音楽に関して1カ月の間に東京や大阪で聞かれるコンサートの数って言えば、数えきれませんからね、それに比べますと当時のともかくその日誓（N響の前身）の定期なんていうとね、もう私なんか1週間前くらいからそわそわしてたんですけども……楽しかったですね」

…… 中略 ……

「山田さんは、東京芸大で一時あの指揮を教えてられて、ま、その中から、手塚幸紀さん、小泉和裕さん、小林研一郎さん、そして矢崎彦太郎さん、とま、今の若手ですね、海外でも活躍するそうそうたるメンバーを、山田さんが育ててになったわけですけども、その山田さんの教育方針というのはどういふところにあったのでしょうか」

「教えないこと。教えられるものではない。その人間を解放することです。結局、こうだからと考える、考えれば考えるほど、細くなってきますね。もっと自分自身を解放しなさいと。それでぼくの音楽観とかいろいろな

日常の会話がその、授業になるわけ。ですからぼくは、ま、こういっちゃ芸大さんに悪いけど、俺の講義には出てこなくていい、ただ僕の周辺をしょっちゅういろと。だからあらゆるオーケストラを僕はやっていますね、練習を見てみると、それが実質的な指揮の勉強になるし、音楽の考え方の問題になると。そんなね、手を左ノ、ほら右で手を上げてノ、なんていうのは指揮じゃないです。ありゃ体操ですよ、笑」

「やーあの私ね、今こう名前をあげました4人の方を考えてみると、全部個性が違うんですね。でやっぱり、こういうそれぞれタイプの違う指揮者をね、なぜ山田さんが育てられたのかっていうのは、今のお話し聞いていて解ったような気がするんです。でもそりゃたいへん重要なことですね」

「重要なことだと思うね、まず解放して喜びを与えて、ということだな、僕の生活を、と言っちゃ大変だけれどもね、ほんとにめぐってめぐってめぐって、歩いて行きました。みんなと……」

「で、最後に聞きたいんですけど、山田さんは常にずーっと第一線をおね、日本の指揮界の第一線をおね歩いてこられたわけで、今後の目標として、とりあえず、どんなお仕事から始めたいわけですか。」

「ぼくはね、今の年代になると、練習場でも例えばモーツァルトとかベートーヴェンとかをどうしてもモーツァルトさん、ベートーヴェンさんはこうだ、こうだ、というようなことを言うわけ、人間は肉体は年をとるけれども、精神というのは年令と反比例してますます若く広くなるわけですね。そうするとやはり、そういう作曲家ともね、なんか本当に会話できるような状況に、大変申し訳ないんだけど、気持ちになっちゃって、どうしても“さん”がついちやう、自然に。と、オーケストラは笑うんですけどもね。笑っても当然みたいにして、モーツァルトさんにはね、絶対ここはゆるしてもらえ、ぼくを許してもらえははずだというようなことをしてどんどんつくっていくわけですね。だから、どの作曲家に対してもこれなら許してくれるというものが、たくさんある、ということ。たとえばモーツァルトにしても一つの様式ありますね、そりゃ様式観を無視するわけにいかないけれども、現在ぼくがやっている、ということはぼくのリアリティーにおいて、絶対にこれしかできないんだと、モーツァルトだっただけでわかってくれるにちがいない。モーツァルトがやはり大変な作曲家ならば、百年後のものを子知もしていたらどうと、けれどもこうしか書けなかったであろうというひとつの制約があったわけ。その歴史的制約をとくのがぼくだと思うんですよ。そういうことで自分勝手といっちゃいけないけれども、よく考えたうえでさせてください。そうじゃなくて様式ではこうだ、というふうに考えてしまうと、ぼくがそこには空白になる。ぼくが演奏するならば、ぼくの現在のリアリティーを充分に、充分にというかそのまま出すのが芸術家、音楽家じゃないかというふうに考える。仮りものだとすれば空白ですよ。コピーだったら空白だ、ぼくがやるんだからしょうがないんだと、誰がいようとそういう心境になった、ということは大変自分自身嬉しく思っています。それで今、何をどうやろうとか、何を、マーラーを全部やろうとか、ベートーヴェン何をやろう全部やろうという風な目標は立てませんね。目標を立ててそこに向かっていく行程の中に、ぼくは不純なものがあると思うのね。もうそろそろ年だから自叙伝を書いて、レコーディングをして、ぼくはそれはもう本物じゃないと思う。その時にやりたいもの、で少なくともぼくはモーツァルト、ベートーヴェン、マーラー、これだけには集中的にしたいという気持ちはございます」

「そうすると、これからの山田さんの、こう一回一回の演奏会、これ聞きのがせませんね」

「そんなことはないですよ、もっと長生きするから。笑」

「いや、ほんとに山田さんの今後のご活躍を本当に楽しみにしております。今日はお忙しいところをありがとうございました」

「こちらこそ、ありがとうございました」 終り

Fグループジョイントリサイタル

6月24日、県民小ホールに於いて、Fグループ主催のジョイントリサイタルが開かれました。出演者はピアノの斎藤真理恵さん（35回）、和山美保子さん（19回）、熊本美也子さん（17回）、ソプラノの斎藤京子さん（34回）、山口誓子さん（16回）の皆さんです。

Fグループジョイントリサイタル に出演させていただいて

山口 誓子（16回）

三宅春恵先生の御推薦をいただきまして、今度のFグループジョイントリサイタルで演奏のチャンスをお与えいただきましたことを先生を初め同窓会のみなさまに心より感謝申し上げます。

結婚当時、歌い続けたい一心で主人の了解を取り、歌の訓練がいかに奥深く、厳しいものか余り知らず、三宅先生に「これからお勉強を続けたいのですがよろしくお願ひします。」と申しました。すると先生は「40歳まで続けられれば本ものね。」とおっしゃったのです。この言葉を伺った時に、私は大変なことを言ったのではないかしら……。とちょっぴり不安が過ったのです。案のごとく不安の中、二人の子供を育てながら勉強していくうちに、この言葉の重みを何度かみしめ、味わったことでしょう。一つ疑問が解決しても、また疑問がわき、一ヶ月に一度のレッスンを待ち遠しくて、やっと解決してもまた……。と本当に奥深く大変なことだったのです。正に先生の御実感だったからこそ私の脳裏から離れることなく、逆に私の励みとなり今まで続けられたと感謝しています。

我家は平均的な四人家族で、音楽用語を用いると四拍子家族なのです。めったに強拍部になれない主婦が強拍になる訳ですから、どんなことになるのか気がなりましたが、弱拍部の連携の良かったこと。何かにつけ「ママは大変なんだから。」といつも誰かに助けられて家族のやさしいたわりが身にしました。リサイタルに出演させていただいたことで、演奏に関する方々ばかりでなく、思い掛けない方々のあたたかい御心使いに接することが出来ましたことも良い思い出となりました。

ある人が「苦しみ深いほどそれを乗り越えた時にその人はキラキラと輝いて見える。」といっています。まだまだ解らないことだらけですが、今回出演させていただいた感謝の気持ちを忘れることなく、歌を通して苦しみ、それなりに輝ける人間になればと思っています。

研修会のお知らせ

■アンリニット・ビュイグ・ロジェ先生をお招きして、公開講座が開かれます。先生はパリ国立音楽院名誉教授であり、1980年に初来日以来、東京芸大などで教鞭をとるかたわら、演奏活動も活発に行っており、しゃべります。

日時 9月30日（火）、10月21日（火）

10:00～12:00

場所 イギリス館

■又、10月9日にはフランスよりガブリエル・タッキーノ先生をお迎えして公開レッスンも予定しております。御期待ください。

お願い・同窓会では近々名簿を改定する予定があります。住所確認の葉書をお送りしますので、御協力の程お願い申し上げます。

大きな贈物

大島 君子 (3回)

昨夏、鮮やかな夕日を受けてきらめくように明かるいウィーンのカールス広場から、近代的な地下鉄駅に下った私は、いさゝか落込んだ悲しい気分が電車の隅に座りました。その2日前に、オペラ座近くの旧城バレー・パルフィのフィゴラザール(幼少のモーツァルトが演奏したので此の名がある)でリサイタルを終え、その日は「ウィーン芸術展」を観ての帰途でした。私は大仕事を終えて少々虚脱気味でしたが、大広間いっぱいのクリムトの絵画に全く圧倒され、芸術とはこうして人の魂を真底揺さぶるものでなくてはならぬのに、私のような凡人が生命をすりへらすようにしてピアノを弾いて何の意味があるのか、とてつもない大きな無駄をしているのではないだろうか。大変悲観的になって、多分そそかき顔で居たと思います。と、前の席(ボックス型ですから)に座っていたすてきな中年カップルの二人が突然「失礼ですがピアノを弾く方ですね?」びっくりしている私に「貴女のリサイタルを聴きました。とてもすばらしかった! 私達に幸せな夜をありがとう。又是非コンサートをして聴かせて下さいね」。私はたま声をつまらせて「ありがとうございます」とくり返すばかり、涙がこぼれて次の駅で降り、たそがれのウィーンの街をよそよそと歩き廻りました。

先頃初夏の或る日、九州の音楽愛好家の肝入りで、シューベルトの曲のレコーディングをしました。放送録音の経験はありますがソロのレコーディングは勿論初めてのこと。キングのスタジオに入った時からこちこちに緊張していて、プロデューサーやエンジニアの方達が、私の音のアラ探しをして食べる鬼のように見え、ひたすら堅くなって一曲弾き終り、ふるえる思いでモニタースピーカーから流れる自分の音を聴いていました。すると肩にふわりと暖かさを感じ、驚いて見上げると一番恐ろしいと思っていたミキサー氏の温い微笑があり、私のセーターが背にそっとかまっていた。途端に鬼達はみんな親切な仲間に変って、その後は何倍も気楽にシューベルトに浸ることが出来たと思います。このレコードは7月下旬の発売です。聴いて頂けたら嬉しいと思います。

この二つのことは私にとって、リサイタルやレコーディングの仕事自体と同じ位の重みを持つ大切な出来事でした。人情のあたみかさ、やさしみ、それを適切に贈る言葉や行為が、贈られた人にとってどんなに大きな意味を持つか計り知れないものがあります。こうした大きな贈物の出来る人になりたいとしみじみ感じています。

私のオルガン雑談

上野 睦 (29回)

帰国して初めてのパイプオルガン演奏会を行ない、改めて、3年前に一大決心をして、ピアノからオルガンへ転向した時のことを思い出しています。きっかけは、ここに詳しく記すこともできませんが、教会や学校での礼拝演奏を通して、また、オルガンを聞くことが大好きだった身内の一人の死を通して、そして実際にパイプオルガンの響きにふれて、いろいろなことが一つになって、オルガンを本格的に習うようになり、思いがけずヨーロッパで勉強できる機会が与えられました。小さい時からピアノを学び、専門に勉強してきましただけに、突然、オルガンへの道がこのように与えられるとは思ってもありませんでした。あちらでは、先生をはじめ友人にもめぐまれ、すばらしい環境のもとに、「音楽をする喜び」を学んでいくことができたことを嬉しく思っています。

一度パイプオルガンに興味を持ったものは、その魅力にとりつかれてしまうと言われますが、私もその一人で、新しいオルガン曲に取組む度に、また、良いオルガンにめぐり会う度に、大きな喜びを味わっています。ヨーロッパでは2000年の歴史を持ち、今もなお、教会音楽として重要な役割をもつオルガンが、キリスト教国でない日本にも、受け入れられ、これから発展しつつあることに、非常に興味を持ちます。オルガン作品の大半は、教会の中にあるオルガンのために生まれたもので、必ず

しも礼拝のために書かれたものばかりではありませんが、今日よく演奏されるオルガン曲は、やはり教会音楽と深いかかわりを持っているものが多いです。特にバッハの作品については、言葉と音楽が一体となって、信仰的に、また音楽的に非常に学ばれます。一つ一つの音符を目で追って行くだけでも、またオルガンに向って、パイプから響いてくる音を聞くだけでも、教えられるという体験は、私にとって大きな驚きです。このような作品を知ったこと、またそれを演奏できる喜びは、もっと良い音楽を作りたいという欲望にかりたてられます。それは、演奏上の技術のみならず、人間的にも成長したい、という思いにさせられてしまうのです。一方では、会堂一ぱいに鳴り響く、尊敬な音楽は、すべてが満たされてしまったような充実感を味わわせてくれます。

日本で最近、コンサートホールに大きなパイプオルガンが入るようになったのは、嬉しいことですが、教会やキリスト教主義の学校にも少しずつ、購入されつつあることに、とても期待する一方、不安もあります。それは、オルガンという楽器そのものについてですが、長い歴史の中で生きた楽器として変化していますから、やはり時代にあった、場所にあった良い楽器が備えられたらと願っています。ヨーロッパでは、古い良い楽器を修復し、維持することにも力をそそがれますが、日本では、やはり新しい良い楽器が長く残されてゆくよう、購入の段階で慎重に取り扱われて欲しいと思います。ピアノと違ってパイプオルガンは、一つ一つ、人間の個性が違うように、同じオルガンビルダーが作っても本当にさまざまな特徴を持った楽器が出来るのですから、沢山、個性を持った、楽しいオルガンが増えて欲しいと願っています。私がヨーロッパで、さまざまなオルガンに出会った中で、日本には、小さくても本当に響く、本当に美しくうたう楽器が入ってくれたら素敵だなあと思いました。現に既に、日本にもそのような楽器がほんのわずかに、入っていることを知り嬉しく思います。それらの楽器は、不思議と、上手に弾くオルガニストには美しく鳴り、そうでないオルガニストによると、まったく、きたなく鳴ってしまうのです。良いオルガニストが育つためにも、良いオルガン音楽が開けるようになるためにも、まず、美しく響いてくれる楽器が、将来、増えることを願っています。オルガンコンサートも、一つのオルガンから、古典、バッハ、現代曲がすべて聞けるよりも、あそこへ行ったら、イタリア古典の音楽が、ここへ行ったら北ドイツ楽派の音楽が開けるというような、本物に近い音楽が開けるようになりつつあることも、嬉しいことです。そして、教会には、神を賛美するに一番ふさわしい楽器が入ってゆくことを願っています。

役員紹介

- 会長 中島 君子(9回)
- 副会長 熊取谷寿子(16回) 永川 忠子(25回)
- 執行委員 永川 恵子(25回) 安部 幸子(21回)
- 永井 晴子(15回)
- 会計 藤村 公子(11回) 伊藤 美奈(29回)
- 書記 細矢 紀子(1回) 丸茂 陽子(31回)
- 会報 鈴木みどり(27回) 小林 周子(29回)
- 長井 朋子(33回) 石井 正美(33回)
- 当番幹事 小又 好子(12回) 山本由紀子(12回)
- 中山 一枝(35回) 松岡 理枝(35回)

昭和60年度会計報告 (昭和61年度末日現在)

収	入	出	
前年度繰越金	11,872,454	三宅生年パーティー費用	2,079,810
60年度寄付金合計	3,000,000	研修会費用(熊本生年)	300,430
三宅生年パーティー会費	832,000	興業会費	66,000
正金	450,000	会費	25,000
振込	382,000	中部支店関係経費	36,000
研修会会費(熊本生年)	28,500	九州支店関係経費	36,000
前橋行子リサイタルチケット代	19,000	関東支店関係経費	36,000
フェリス・マカドイ受贈品チケット代	349,000	会費	214,060
フェリス・マカドイ代	4,170	会費	146,420
興業銀行利息	75,828	40年北村合会費用	28,450
前年度銀行利息	236,340	興業銀行利息(日本)キット	66,000
		興業銀行利息(熊本)代	600,000
		興業生記念品メダリオン、フォーナ代	200,800
		コード購入	8,200
		事務用品、通信費	36,780
合 計	16,880,302	合 計	3,953,940
		次年度繰越金	12,926,362

計 報 大橋輝枝さん(35回)が御逝去なさいました。つつしんで御冥福をお祈りいたします。

～支部だより～

<中部支部> 支部長 峯 沢 絹 子

今年役員改選があり、3期目に入りました。新役員を紹介いたします。

- 支部長 峯 沢 絹 子
- 副支部長 岡本 博子・服部 幸子
- 会 計 滝川さち子・大原 寿美
- 書 記 高松 明子・鈴木 久美子
- 庶 務 水平 元子

以上至りませんが2年間努めさせていただきますので、よろしくお願ひ申します。

今年の行事としましては、10月7日(火)、名古屋市芸創センターで「ピアノ三重奏と歌」(メンデルスゾーンとスメタナ)の演奏会を開きます。東京・横浜のベテラン同窓生の応援を得ております。是非とも御来聴くださいませう。紙面を借りてお願ひ申し上げます。

「ジュニア・シニアコンサートについて」

副支部長 岡本 博子(15回)

中部支部では様々な面から皆様との交流を深める意味で「ジュニア・シニアコンサート」を企画しました。

これは卒業生の指導している生徒達の合同の発表会で1983年から毎年春に一回行っております。条件にあったホールを探し希望の日時を取るのに苦労しますが、幸い今までは皆様に満足して頂けるホールを確保出来まして毎年60名前後の出演者に利用頂いております。

小人数でも大きなホールを使用でき、又他の先生方の教え方等勉強になり、様々な曲の知識等参考になると評判が良いのでこれからも続けていきたいと思っております。来春の第5回目のコンサートは新しいホール「電気文化会館コンサートホール」を予定しております。これからは、レベルを考えてプログラムを組んだり、リハーサル等、検討したりしてコンサートの内容を更に充実し有意義な会にしたいと思っております。

<西南支部> 田 村 淑 子(8回)

昨年10月から1月迄、毎月1回音楽科主催のセミナーが開講されました。突然の企画で、支部としての手伝いが行き届かず残念でした。

5月18日には、中島恭子会長御出席のもと、支部総会を開催しました。名簿上での西南支部在住者は200名にもなり、年毎に増えています。地理的にも、広範囲にわたり、皆様の動向がつかめないのが実情です。今回も移転、行方不明等で、返送されたハガキの方が返事よりも多い状態でした。

- 総会で決定された事務は、次の通りです。
1. 本部規約に基づき、支部としての規約が提案され、承認されました。
 2. 新規規約に基づき役員を改定する。
 3. 事務局を日本楽器福岡店に置く。(移動の時は此処に連絡する。)
 4. 支部同窓会は、毎年5月第三日曜日に開催する。
 5. 新しく名簿を作成する。

以上の事です。会の終わりに百周年の折のN響の伴奏により、校歌をうたい、本校の発展を願ひながら閉会しました。

Fグループ後援演奏会

- '86 6月1日 増井祐子(33回)
- 平井美智代(31回)
- ジョイントコンサート 下関市民会館
- '86 6月8日 上野 睦(29回)
- パイプオルガン演奏会 大森めぐみ教会
- '86 6月10日 大庭照子(10回)
- リサイタル 芝郵便貯金ホール
- '86 7月5日 佐藤ゆり(25回)
- 日本の歌 鎌倉中央公民館ホール